

[経営測定研究室]A. 林業経営に関する研究 : 3. 椎茸 榎木の雑菌防除方策の基礎的研究

青木, 尊重
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

柿原, 道喜
九州大学農学部附属演習林 : 助手

吉良, 今朝芳
九州大学農学部附属演習林 : 教務員

<https://doi.org/10.15017/1456257>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和41年度, pp. 67-69, 1967-07-10. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

(3) 比 較

(1)、(2)の結果を比較すれば、相知型スギ肥培林は経済的伐期令が低く、短伐期林業を指向するスギ林分造成に適しているといえよう。

3. 椎茸^{椎茸}木の雑菌防除方策の基礎的研究

青木 尊重・柿原道喜・吉良今朝芳

I. 目 的

椎茸栽培は、純粹培養種菌の開発改良にともなつて、全国的に普及し、栽培農家が漸増してきている。これにともなつて最近では、雑菌の発生が目立つてきており、その防除方策が生産者をはじめ、研究者においても、重要な関心事になつてきている。

理論的には椎茸菌と雑菌との間における生育上の異なる性質を利用して、雑菌の侵害を防ぎうるといへども、実際問題としては薬剤を用いること、また^{椎茸}木内に早期に椎茸菌糸を十分にまんえんさせることが考えられる。

そこで、この試験では、薬剤を用いると同時に、単位当り種菌打込み量を変えて、椎茸発生量をみてみた。

II. 試 験 の 方 法

(1)試験地の位置と設定

位置：福岡県粕屋郡久山町中久原

九州大学農学部附属演習林粕屋地万演習林久原作業所内

林況：モリシマアカシヤ林内

(2)供試材料

樹種：クヌギ、樹令：20～25年、中央直径：5～20cm、長さ：1.5m

原木伐採：昭和37年12月、玉切：昭和38年2月、種菌打込み：昭和38年3月

(3)種 菌

種菌メーカー：3社、品種：8品種

(4)薬剤処理

薬剤処理時期

椎茸発生前

第1回 昭和38年4月

第2回 昭和38年12月

第3回 昭和39年9月

椎茸発生後

第4回 昭和40年4月

第5回 昭和40年12月

薬剤処理液と処理方法

処理液：水10ℓに対してP.C.Pw 1Kg

処理方法：噴霧器で均一に楕木に散布する。

III. 試験の結果

椎茸発生の主要な年次における品種別椎茸発生を8品種平均値に対する指数によつてみてみるとつぎのとおりである。

品 種	㊶ (指 数)			㊷ (指 数)		
	椎茸個数	生重量	乾重量	椎茸個数	生重量	乾重量
A	129%	167%	143%	79%	116%	99%
B	81	75	79	47	52	48
C	74	80	86	125	135	134
D	112	129	147	107	152	119
E	78	62	82	85	62	89
F	56	77	63	43	63	67
G	84	57	67	184	145	171
H	186	153	132	130	74	72

注㊶： 木末口直径1cmに対して種菌2個打込み

㊷： 木末口直径1cmに対して種菌1個打込み

まず種菌単位当たり打込み個数を一般打込み個数(㊷)よりも多くした場合、(㊶)との対比をしてみると、(㊶)と(㊷)の間には殆んど全体的には差がみられない。つまり椎茸個数にもまた生重量、乾重量においても同様であつた。

また、この試験結果から椎茸発生量が品種間に大きな差異を生じていることがわかつた。

さらに本研究の主目的である雑菌と椎茸発生量との関係をみてみると、椎茸発生量の多いA、D、H、3品種のうちA、Hは雑菌の発生も多くなつているが、D品種については雑菌発生がも

つとも少なくなっている。また一方椎茸発生量の少ないB、C、G品種は雑菌発生も少なく、またE、Fは雑菌の発生が多く、同時に椎茸発生量は少なくなっている。

従つてこの試験結果から考えられることは先にものべたように、椎茸種菌は自然的環境条件に大きく左右され、そのためかなり雑菌が這入つてきても椎茸の発生がみられる場合もあるし、それとは逆に雑菌があまり侵入していなくとも、椎茸の発生量は少なくなつてあらわれている場合もある。これは椎茸栽培をおこなう場合、その地域に適した品種(種菌)の選択が何よりも重要であることを物語るものである。と同時に雑菌の防除方策に対しても十分の考慮をはらう必要があると考えられる。

B. 林業機械に関する研究

——— 集運材用半調整式架空線について ———

中 尾 博 美
石 津 一 実

I. はじめに

前回まで半調整式架空線につき、その運搬荷重の描く曲線 - 軌跡 - と中間支点乗越しの難易の判定、次いで、衝撃荷重の問題についてその衝撃の緩和能力、以上2点につき常に条件を同じくして、固定式架空線の場合と対比させて実験的に究明して来た。

その結果

- (1)半調整式架空線の荷重点軌跡は重錘上昇前の最短主索長における固定式架空線の荷重点軌跡と、荷重がスパン中央にある時の最長主索長における固定式架空線の荷重点軌跡の間に描かれる。
- (2)運搬荷重の描く軌跡から、半調整式架空線の方が両端固定式架空線より、支点附近での索屈折角が小さい。すなわち多支間索道について想定する時、中間支点乗越しが容易であろうということが推測される。
- (3)衝撃係数は従来言われている主索緊張度との相関よりは運行速度との間に、より緊密な相関があることが実証された。

なお、固定式架空線の場合の衝撃係数式は

$$a = 1.166v - 3.27 \quad (9)$$

半調整式架空線の場合の衝撃係数式は